
外伝 王の竜玉

yumenisiki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外伝 王の竜玉

【Nコード】

N1993R

【作者名】

yumenisiki

【あらすじ】

本編「王の竜玉」の外伝です。

本編の未来編、過去編様々です。

本編が主な更新となりますので、こちらは気まぐれ更新です。

運命の時の物語

神楽が閃を治療してから二人の関係は一気に変わった

閃にとって神楽は

やってくる患者さんの怪我を看て悲しい表情をしたり、元気に戻っていく姿を見て笑ったりクルクルと表情の変わる可愛い生き物という感じであつた

だが、時々モヤモヤした感情が出てくる

神楽と話していたとき、急な患者や来客に神楽の視線が奪われる瞬間である

何か胸の辺りが、モヤつとした感じがしたり、イラつと感じがする特に男が相手だとその思いは強くなる

2

この感情が一体何なのか分からない

だが、神楽の視線は移ろいで欲しくない

自分だけを見つめて欲しい

どうしたら彼女の視線かぐらを独り占めできるだろうか

ウーンと悩んでいると閃は村の子供達に囲まれた

閃より年齢も体格も上の子供達だ

「きよ、今日こそは！！ぜ、絶対にお前を倒す！！」

「泣かせてやる！！」

囲む男の子達は何処かしら傷を負っている

その傷は閃に負けて付いた傷だ

剣の練習を怠らない閃はこの村の男の子の中で一番強くなっていた
閃のことを嫌う子供達は何とかして閃を負かそうと5〜6人で戦い
を挑んでいく

だがその度に負かされて泣いて神楽に治療と受ける

それが閃にとってはイラっとする

イジメにきて負けて神楽の視線を独り占めできる

そんな奴らがむかつて閃はついつい力が入ってしまっ相手を負
かしてしまう

どうしたものかと閃は囲まれているにもかかわらず考え事をしていた

「へ、っへ！こいつビビッてやがる！」

「泣いて許しを請うなら許してやってもいいがな！！！」

動こうとしない閃に男の子達は調子にのる

「泣いて……そうか！！！！！」

閃はいい考えが浮かんだ

満面の笑みを浮かべて

「うっうっ……え~~~~~~~~ん！！！！！」

村中に響くように閃は大声で泣いた

それに驚いたのは村の子供達だ

今まで負かされ続けてきたのにいきなり閃が泣き出した
オロオロと右往左往してしまう

「何やってんの！！！」

いきなり可愛らしい声が響いた
びつくと体を震わせて男の子達は声の方を向くと神楽が片手に身
の丈よりも長い棒を持ってたっている

「閃に何してるの！！！」

素早く駆けだし閃の元に近づく
そして棒の先端をガキ大将に向ける

「暴力は嫌いだよ！もし閃をいじめたら許さないからね！」

閃は確かに強い。だが、それより強いのはこの幼い神楽だ
技のスピード、身体能力の高さどれをとっても神楽に敵うものはい
なかった

その神楽が棒の先端を向けている
明らかに分が悪いと思った男の子達は急いで駆けだして逃げていった

「もう！！・・・大丈夫閃？」

駆けていった者達を見送って神楽は閃に向き直る

閃の瞳には大粒の涙が浮かんでいる

「大丈夫？どこか怪我した？」

神樂は何処も怪我をしていないか閃の周りを見渡す

泣きやまない閃に神樂は心配になって閃の頭に手を伸ばす

一生懸命になって閃を泣きやまそうと手を伸ばして頭を撫でる

閃が泣きやまないので神樂も瞳に涙が浮かぶ

でも泣かないように閃を慰め続ける

閃はニヤリと口角をあげたくなるが必死になって堪える

神樂の瞳を独り占めしている

瞳以外にも心まで支配しているようだ

泣かないように必死に堪える神樂が可愛くて可愛くて今すぐに抱きしめたいくなる

だがそんなことをすれば神樂は閃がからかっていると思って怒るだろう

この視線を独占したい

こうして閃はわざと泣くようになった

強さでは明らかに閃の方が子供達より圧倒的に強いが

わざと負けることで一目散に神樂が閃目掛け駆けてくる優越感

その高揚感のためだけに閃は何度だって負けてやる

ただ真っ直ぐに見つめてくれる神樂の瞳がある限り……

竜の霍乱！？（前書き）

未来編です

竜の霍乱！？

王都では久々の雪が降り、一面を銀世界へと変えていた
近年まれに見る寒さに王都では風邪が流行していた

そんな寒さの中、王宮ではこんな人物が風邪を引いた

いつものように朝議で閃の警護に竜將軍こと神楽はあたっていた
いつもの簡易の軍服に帯剣と玉を携えていた
だが、その顔には仮面はない

すでに正妃としての地位を確立し、後宮での生活を送るべき存在となっていた神楽だが閃の傍で政治面、経済面、軍事面の意見を官吏達の前でも対等に言える存在となり民からも絶大の支持を得ている

女の視点ならではの意見は？国をさらに活気づかせている

いつもの朝議の間での審議も終わり、閃が自室での執務に戻ろうと
玉座から立ち上がろうとした

「？」

いつもなら玉座を立ち上がると同時に立つ神楽の音がしない
不審がり閃は玉座の左横にある正妃の座を見ると

「！！！！神楽！！！」

正妃の座に座り、肘置きに肘をついて上体を斜めに倒して手は頭を押さえている

顔はよく見えないが覆っている手の隙間から神楽の顔色はかなり悪い

平伏している官吏達は王の声に一齐に顔を上げた

礼儀もなにもあったものではない閃はすぐさま神楽に駆け寄り様子をうかがう

「神楽？大丈夫か？どこか気分が悪いのか？」

閃の声に反応するかのように神楽が少し顔を上げると閃の顔は蒼白になる

外で軍事訓練などを行う神楽だがという訳か、肌が焼けることはない

白すぎる肌というわけでもない

だが今回だけは顔色が白い

いつもであれば紅も付けない唇は桃のよう^{べに}にふつくらとしているが、今日は真っ青である

唇が震えるように開くが、声を発することなく

神楽は気を失い上体が重力に任せて前にいる閃に向けて倒れ込んでくる

「神楽！！神楽！！！」

どんなに閃が声を張り上げてもピクリとも神楽は反応はしなかった神楽の体は火のように熱く、呼吸は全力疾走したかのように荒い

「医師を呼べ！！すぐに呼べ！！」

官吏達から声が上がる

王宮は上へ下への大パニックである

あの竜将軍が倒れたのである

後宮の王妃の部屋では女官達が中の様子を探ろうと必死になって壁に張り付いている

「ねえちよっと・・・中の様子分かる？」

「ちょ！うるさいわよ！！気づかれたらどつするのよ！！」

10人ほどの女官達が壁に押し合いへし合いしながら、廊下で騒いでいる

ガチャ

いきなり王妃の部屋の入り口が開いた

女官達は蜘蛛の子を散らすより早くその場を素早く離れた

「・・・女官は元気ですなあ」

「・・・彼奴ら・・・すぐさまクビにしてやる・・・」

「その様なことをなさいますと王妃様怒られますよ」

部屋から出てきたのは閃と医師である阿宗^{あそ}医師である

阿宗医師は60を越えたばかりの真つ白な髭が特徴的な老人だが、様々な薬草や医術を持ち、医術界にとっては知らぬ者はいないと言うほどの人だ

「・・・では・・・給料削減・・・」

「ほっほっほ。それでも正妃様に怒られてしまいますよ。」

この医師にとつてこの年若い王と正妃は孫にも似たような存在で、ついついからかってします。

？国広しといえど閃王相手にここまで言える存在は正妃以外この医師ぐらいだろう

阿宗医師の言葉に閃の眉間にしわが寄る

「ほっほっほ。せつかくいい顔なんですから、そんなシワを残しなさんな。」

「さっさと出て行け！！このクソじじい！！！！」

言葉で言い負けた閃は叩き出すように医師を追い出した

「まったく・・・あの狸が！！」

部屋に残った閃は扉を閉めながら憤慨していた

本当であれば激怒してこの老人一人どうにでもなるが、妻である神楽が先生と呼んで慕っているので、どうすることも出来ない

ましてや、医師としても阿宗医師と肩を並べる神楽がダウンしてい

る以上神楽を診せる人物は阿宗医師に頼るしかない

閃は荒々しく歩いていたが寝台に寝ている神楽を見た瞬間、その足音を消して神楽に近づいた

息は荒く、意識はまだ戻ってはいない
手に触れると火のように熱い

風邪と言って甘く見てはいけない
毎年多くのものが風邪で亡くなるものは多い

替われるものなら替わってやりたい
愛しい人が苦しんでいる

張り裂けそうなほどの痛みが閃を襲う

失うのが怖くて神楽の手を握りしめる
自分より一回り小さな手が儚く消えてしまわないようにしっかりと握りしめる

すると、ピクリと神楽の手も閃を握り替えてくる

「……神楽？分かるか？」

手を握ったまま神楽を上から見る
何度か瞬きしていつもより弱々しい瞳が目を開ける

神楽の顔の輪郭を確かめるように閃の手が滑るように撫でる
状況を把握しようとする神楽の瞳が虚ろに周りを探る

「この頃無理をしすぎたのだろう・・・風邪を引いたみたいだよ・・・」

神楽を安心させようと閃が声をかける

すると神楽は掛け布団から手を出して閃を拒絶するように
閃を押しやる

「な！ど、どうしたんだ！神楽！俺だ！閃だ！」

イヤイヤと首を振り閃を近づけさせないように神楽は抵抗する
その抵抗はいつもであれば強いかもしれないが、今日は弱り切つて
いる神楽だ

その抵抗虚しく閃に抱きしめられる

「頼む！！拒絶しないでくれ！！」

その声に神楽の抵抗は止む

「・・・閃・・・移ります・・・」

観念したかのように神楽はポツリという

「移してもいい・・・いや移した方が早く治るという。君が苦しんで
いる姿なんてもう見たくない・・・」

「ダメです・・・あなたの代わりはいないのでしょ。」

「だったら君の代わりもない・・・頼むから俺を拒絶するな・・・君
に拒絶されたら俺はどうしていいのか分からない・・・」

苦しげな閃の声に、抱きしめてくる閃の腕が震えている

愛されていることが実感できる

この手を振りほどいて、この声を聞かずに生きてはいけない
この人無しに神樂も生きてはいけない

「閃。移らないようにしてくださいね。」

「それは寝台で言う台詞ではないぞ、神樂」

「えっ」

神樂の唇に押し当てられる閃の唇が全てをのみ込むように覆い被さ
ってくる

少し開きかけだった唇に舌を潜り込ませ、口内をまさぐり出す

神樂が病人であるということを忘れて閃はキスに溺れた

閃を押していた神樂の手がクタリと寝台に落ちた時、閃は意識が戻
った

もう一度神樂を見つめると顔を真っ赤にして酸欠になって神樂は意
識を失っていた

「やべっ！やり過ぎた！！」

反省する気持ちと下半身からわき上がる欲情をどう抑えようかと閃
は悩む

「早く良くなってくれ・・・神樂・・・」

すでに意識がなくなつた神樂の頬にキスを落とし、寝顔を眺め温か

く見守るのであった

閃は神楽の傍を離れることなく看病をし続けた
それにより

数日間全く政務が進まず、正妃のもとに多くの官吏達が泣きついて
きた

神楽に諭され閃はやつとイヤイヤ、しょうがなく、何度も振り返り
ながら執務に向かった

その数日後、閃王も風邪を引き、神楽の看病を期待して寝台にウキ
ウキとしていたところを正妃の神楽から雷が落ちたことは言っまで
もない

新たな竜の誕生（前書き）

未来編です。色々ネタバレ中です。

新たな竜の誕生

いつものように朝が明けた
雲一つ無い空に太陽が昇る
冬の寒さが落ち着きをみせ、日差しに暖かさを感じ始めたあるある
日のこと

王宮の協議の間では無理難題な協議もないままいつものように終わりを告げようとした

「ちょっと待って貰いたい！一つ報告がある」

その静かな空間を破ったのは閃王の玉座の横に座る正妃、神楽の一言だった

「みんな、すまないがもう一つ報告がある。」

「何？医療の件だったら阿宗医師から報告は受けてるけど？」

珍しく声を上げた神楽に閃は顔を向ける

ニコリと微笑みを浮かべる神楽はいつもと違う

「先ずは閃に報告をと思っていたのだが、色々あって遅くなったの今報告するね。」

官吏達が見つめる中、神楽はゆっくりと手を動かしてお腹に手を置いた

「この間分かったのだけど、子供が出来たの」

満面の笑みを浮かべる神楽と固まった空間

「ふふつ。子供が出来たら、仕事に少し支障を来すことがあるかもしれないけど、やれることはしたいの。それに動いていた方が、赤子にもいいみたいだから、軍の訓練もするし、治療などの仕事はするわ。報告終わり。お昼からも頑張りましょうね!」

ルンルンに椅子から腰を上げて上座から降りようとした

「おっと!」

いつもだったら転けるような小さい段差に神楽の足が取られた

「のわわわわわわわわ!!!!」

「あわわわわわわわわ!!!!」

官吏達、閃王から悲鳴が上がった

体が傾いた神楽の手を閃は急いで掴んだ

急いで自分の方に引き寄せる

柔らかな肢体が、自分より小さな神楽の肢体が倒れ込んでくる

「ありがとう閃。大丈夫よ。こんなので転けないわ」

笑みを浮かべる神楽に新たな命が生まれている

それも自分との間に生まれた新しい命

母親になった笑みがさらなる魅力をもせているが、ここで神楽を離すわけにはいけない

「女官長！！女官長をすぐに連れてこい！！それと三老！今日の仕事はせん！！それと、えつとえつと・・・あ、温かいものを温かくするように着物、いや締め付けるものはいかん！羽織を今すぐ持つてこい！！神楽、気分は悪くないか？大丈夫か？その吐き気とか無いかな？」

慌てた閃王の指示にやつと官吏達も動き出した

それから上から下への大騒ぎだ

誰もが駆けだして女官を呼びにいたり、衣装を取りに行ったり、食べ物を取りに行ったり、謎の行動を示す者が多かった

ただ二人、まだ若き夫婦に笑みを浮かべる阿宗医師と閃に抱っこされた呆然と運ばれる神楽だけがどうすることもなくこの場に流された

「もう！何て事するのよ！この馬鹿！！」

暖かな毛皮や火鉢やたくさんの果物に囲まれた状態で神楽は寝台に押し込められていた

「何を言っているんだ！神楽！僕たちの子だぞ！守らないでどうする！！ましてや君は母親になるんだ！大事な体だ！」

「母親になることは弱くなる事じゃない！強くなることです。」

「だけど・・・神楽・・・」

まだ着せようと羽織を持ってウロウロする閃にあきれてしまう

「もう！父親になるのですよ！」

「そうだけど・・・俺は君に似た女の子がいいなあ。でもそうしたらお嫁に行かせられない!!」

「そんなことはないわ、閃に似た男の子がいいわ。格好いいもの」

「な!!浮気発言かい!!」

「何言ってるのよ!!あなた以外好きになるわけ無いでしょう!」

「!!!!嬉しいこと言ってくれるね」

にやけた表情の閃は神楽にすり寄ってくる

「ち、違うは!そのこれは!!」

寝台の上で顔は真っ赤にする神楽を閃はゆっくりと抱きしめる
この世で最も愛しい存在がさらに愛しく思える

「俺も愛してるよ。神楽。男、女どっちでもいい。元気な子でさえすれば、それでいい。」

「そうね。私もよ。」

「これからもよろしく。お母さん。」

「ふふつ。よろしくお父さん。」

お互いに笑みを浮かべて唇を近づける
ただ触れ合う唇がどんどん深くなる

神楽の口内に侵入した閃の舌は縦横無尽に動き回る

長い口づけが終わると寝台に横たわった神楽が荒い呼吸を繰り返す
この火照りはこの部屋の暑さのせいか、それとも二人が生み出す熱
のせいか

だがその熱は嫌悪を覚えることなく愛おしく思える

いずれ生まれる新たな竜を二人で抱きしめるその日を楽しみに待た
びる

この半年後、男の子が生まれる

この者は後に閃王より早く亡くなるものの、短い生涯の中で運命の
出会いをはたし最高の相手を得る

その間に生まれた子供が？国史上最高の繁栄をもたらすこととなる
それはまた別の話……

母に感謝を・・・（前書き）

未来編です

子供達大集合です。

母に感謝を・・・

晴れた春の日差しのもと、幼子達が計画を練っていた

「これでいいかなあ？」

「うーん？ちょっと違うないか？」

「いいのよ！！かあしやまが言ってたでしょう！！ようは心意気なのよ！！」

「心意気って？」

「知らない」

「でも、やるしかない！！やるぞ！！」

「」「おう！！！！」「」「」

幼子達の計画はいかなるものか・・・

「閃・・・起きてください。朝ですよ。」

すでに太陽が昇ったというのに未だに寝台の住人である閃に声をかける

「・・・・・・・・」

だが返答はいつもこれ

「ふう〜〜〜。分かりましたよ。」

毎朝のことだがいつも恥ずかしい

寝台に近づいて未だに狸寝入りする閃の額にキスをする

「起きてください。旦那様」

「額より口がいい。」

いきなりの閃から伸びた腕は後頭部に回り引つ張られて唇にキスをする

「ちよつと・・・あう・・・ん」

口内に入り込んだ舌が共に寝台の住人になろうと誘いをかけるが

「かあしゃまを放せ！！」

ベシッ

可愛らしい声と同時に閃の額を叩いたのは次男の竜雅^{りゅうが}御年5歳

まだまだ母親離れできないお年頃

それ故父である閃は目下の恋敵

いつかはかあしゃまを奪ってやろうと奮闘中

だが大人気ない父親である閃は真っ向から立ちはだかって連戦連敗
それ故いつもかあしゃまに泣きついて慰めて貰う

そうするとかあしやまは頭を撫でてくださる

その時の父親の表情といったら・・・勝った（↑御年5歳です）

「このクソガキ！！いつも寝室には入ってくるなと言っているだろ
う！！」

烈火のごとく怒った閃はすぐさま竜雅を掴もうとつするが、身体能力の高い子供達はその手を離れて神楽に抱きつく

「かあしやま！！おはようございます！！」

「はい。おはようございます。竜雅はえらい子ね。一人で起きれる
んだから」

「ちょっと神楽なにげに俺を馬鹿にしてない？」

「お心にお聞きください。思うところがございますなら、良心が痛
むはずです。」

「うつつ」

未だ寝台にいる閃にとっては分が悪い

返す言葉がなければ、抱きついていてる竜雅の顔がニヤリと笑っている

「かあしやま！！今日はお仕事無いんだよね！！」

「ええ無いわよ。みんなが何かしてくれるって言ったから、楽しみに
していたのよ」

愛しい妻と自分の子供の会話は夢にまで見た光景だが引つかかるどころがある

「神樂？今日えつと？」

「今日はお休みをいただいています。閃はお仕事頑張つてね。」

「えええ!!! ねえちよつと、俺も休むよ!!! 家族団らんはお父さんも必要でしょう!!!」

「いらない」

可愛い声で拒否してきたのは次女の燕御年えん4歳可愛らしい風貌で小さい頃の神楽によく似ている

そしてかあしゃま大好きッ子

「かあしやまは私たちと遊ぶの！……い……い……つつも、とうしやまがかあしやま盗っちゃうもの……今日くらいかあしやまと一緒にいたい……！」

「そうですよ。父様。今日くらい私たちに母様と過ごす時間をください。」

それ続けとばかりに長男竜祥が入ってくる。

「父様は今日は確か、外交の日ではありませんでしたか？」

その後は長女瑠璃

「酷い!! お前達お父さんを蔑ろにするきだな!! いいよいよい!!

「！なら俺だけ仕事いつてやる！！後で寂しくなっただって来てやらないからな！！」

寝台を降りた閃は寂しそうに一人仕事へと向かった

「お前達。父様をいじめてはいけませんよ。」

「だって・・・今日はかあしやまと・・・」

「うん・・・。だってね、今日はね・・・」

「はあ~~~~」

仕事に向かって一人寂しく仕事をする

いつもであれば妻である神楽が助言や意見をして、会話を楽しんだり時には共に茶を飲んで息抜きもする

その神楽がいない

そして朝からの子供達の言動が心にヒビを入れる

父親として子供達を愛し守ってきた

子供達との時間を多く作り、神楽のよき夫になるように頑張ってきたがどうしたわけか、子供達は全員母様命になってしまった

「何処で育て方間違った？」

思い返しても何処も間違っていないような気がする

確かに毎日神楽争奪戦で大抵は勝利しており子供達から冷たい目をされているような気がするが、気になどしてはいられない

「はあ～～～」

「おやおや、陛下？今日は王妃様の傍になくてよろしかったのですか？」

何度目かの溜息をついたときに阿宗医師が書簡を持ってやって来た

「阿宗か……。はあ～～～。俺は子供の教育を間違ったようだ・・」

「おやおや珍しい。陛下が反省などされるとは。」

「どういう意味だ。」

「ふふふっ」

好々爺のように笑う阿宗だが腹の中は真っ黒の狸親父だ

色々と世話になった部分があるため強くは言えないが、ある意味天敵とも言える

「お子様方はよくお育ちですよ。あなたによく似て王妃様を大切にされている。今日だってそうでしょう。」

「?????どういう事だ??」

「ですから、今日は……」

あらましを聞いた閃はすぐさま職務を放棄してすぐさま神楽達のいる後宮へと走り去った

「かあしゃま！！おいしい」

「ええ、おいしいわ。」

竜雅が差し出してきた黒い物体を何とか飲み込みながら褒めると竜雅は満面の笑みを浮かべて喜ぶ

「ならこれは！！これね、燕が作ったんだよ！！」

「これもおいしいわ。」

竜雅に負けるかと燕は必死になって差し出してくるそれをゆっくり租借して食べると何かガチツと音がしたが、ヨシヨシと頭を撫でると花が綻ぶように笑みを浮かべる

「竜雅！燕！！そんなに母様にひつついていたら母様の休息にならないでしょう！！」

「瑠璃。いいのよ。それより瑠璃の作ったのもおいしいわよ」

長女の瑠璃は甘えたくても甘えられない距離にヤキモキしているが、母親に褒められるとつつすらと頬を染める

「母様。お茶をどうぞ」

「竜祥もいい男に育っていつて母様嬉しいわ。」

父親から嫌と言うほど母親は大切にしなければいけないと習ってきた竜祥にとって、女性に優しくとは当たり前のことであり、母からの言葉はまさにその評価とも言えた

四阿で子供達が作った料理を食べている

あちらこちら焦げて真っ黒になっているのもあったが、親の鼻屑目からしても喜んで食べた

子供達はキャツキャツと笑い、久々の子供達との触れあいに頬が弛むふと、視線を感じて振り向けば必死に隠れようとしているが丸見えの夫がいた

「閃・・・」

ポツリと零せば子供達はその視線を追って父親に目を向ける

「「「とうしゃま！！父様」」」

呼ばれた以上出て行くしか無いといった感じで閃は渋々出てきて視線を彷徨わせている

「その・・・あの・・・」

「閃。お腹すきませんか？これだけの量は私一人では食べられませんわ。」

「神楽！！」

「みんなもいいですね？」

「「「・・・はーい」」」」

閃はにこやかな笑みを浮かべて子供達を押しつけて神楽の横に座った
そして愛しき妻の肩を抱いた

「とうしゃま！！邪魔！！」

「そこは燕の場所なの！！」

「大人気ないですよ。父様。」

「母様、男見る目無いですわ！！」

子供達は大人気ない父親の行動に文句は言うが笑顔がある
笑いあいながらゆるりとした時間を過ごしていく

夜も更けた頃

今夜もまた勝利した閃が神楽と共に寝台に横になる
真近くにある閃の顔を見ながら

「今日は楽しかったですね。閃」

「そうだな。」

「にしても、今日は何だったのかしら？子供達があんなにはしゃいで？」

いつにもまして子供達の独占欲が強くて笑いが絶えなかった
でも今日にこだわった子供達が一体どうしたのだろう

「今日は母の日だよ。今日は母親に感謝して家族団らんをする日。
いつもありがとうお母さん。」

ギュッと抱きしめる閃の腕に神楽も抱きついた

「母になる喜びをくれたのは閃がいてくれたからです。母親にして
くれてありがとう閃」

涙を浮かべて頬を染めた神楽

「・・・そうかそうか。そんなに感謝してくれるなら、もっと頑
張らないと!!」

「頑張る?」

「もう一人子供欲しいと思わないか?」

「えっ??」

腰に回った手が怪しく動き出す

「ちょ・・・ちよつとまっ・・・あっあん」

「来年も再来年も母親になる君に愛を捧げよ」

こうして平和の?国の夜は過ぎていく

来年の今頃は新しく生まれた子供とまた新しい団欒を気づくことに

なるだろう

母になる喜び、悲しかった過去を乗り越えて手に入れた幸せ

今を手に入れることが出来た感謝を

生んでくれた母に、育ててくれた母に

多くの母親達に感謝の気持ちを・・・

彼らの日常

静けさを裂くような叫び声があがった
それと同時に倒れるが複数おきる

「・・・無念・・・」

最後に倒れた黒ずくめの男は恨みの言葉を残すように倒れた

カチン

竜將軍は周りに武器を持った者がいなくなったことを確認すると
玉の付いた剣を鞘に戻した

「お怪我はありませんでしたか？」

一応形なりの心配を声かける

「・・・うーん、君が壁に押しつけなければ頭を打たなかったよ・・・」

ほんの数分前、いきなり王宮の回廊で3人の暗殺者の奇襲に竜將軍
は閃を壁側に押しつけ

飛んでくる暗器をことごとく剣で打ち落とし

逆に打ち落とした暗器を拾い上げ、暗殺者に向けてはなった

見事それは一人の暗殺者の足首に刺さり、相手の動きを封じた
向かってきた暗殺者には二、三度剣をあわせた後、床へと叩き付けた
そして、後方にいた暗殺者に対して竜將軍はニヤリと口をゆがめた

その笑みに恐怖を覚えた暗殺者は背中を向けてしまった
だがそれが最後だった

「遅い。」

耳元で聞こえた死刑宣告

いつの間にか背後にいる竜將軍の顔を確認する間もなく
脳天を襲う衝撃に暗殺者の意識は奪われた

3人の暗殺者が倒れていた後の閃の台詞があの気が抜けるような台
詞である

「申し訳ありません。この場所は見晴らしも良く、まさかこのよう
な場所で暗殺を企てるとは……。配慮不足でした。」

竜將軍は跪き閃王に詫びを入れた

「ははっ、別にいいよ。こうやって無事なんだし。ましてや、相変
わらずの武術のすごさだ。この城の兵達もこのくらい強ければいい
んだけど・・・」

騒ぎを聞きつけ、やっと兵達が駆けつけてきた

「陛下！！ご無事ですか！！」

「お怪我はありませんか！！」

バタバタとやってくる兵や官吏の者達に閃王と竜將軍は苦い顔をす
るしかなかった

「こ、この者達は！！」

倒れている暗殺者の姿に狼狽える兵と官吏に頭が痛くなる

「その者達を牢へ。陛下を襲った罪で後で取り調べをする。」

立ち上がった竜將軍から発せられる声に兵や官吏の者達は震え上がる

竜將軍は顔半分が仮面で覆われているため、感情を読み取ることが出来ない

唯一読み取ることが出来るのが、声だ

だがその声も、常に一定のトーンで話すため、これもまた感情を読み取することは難しい

だが今回は違う

竜將軍は怒っている

ヒヤリとする空気にはここは戦場かと誰もが思えた

パンパン

手を叩く音に静けさは破られた

「はいはい。兵士さん達ぐずぐずしない。きびきび動く！」

明るくおちゃらけた閃王の声にその場がゆっくりと動き出す

「陛下……。」

「はいはい。竜將軍。これから会議だよ。見せつけてやろうじゃないか。まだ私は生きてることを。何度暗殺者を向けようと、竜將軍がいる限り私は死なん。だろう？」

閃王の黒き眼は悪戯を思いついた子供のように輝いていた

「はい。私がいる限り、陛下には指一本触れさせはしません。あの時の誓いから、変わりません。」

「なら行こう。遅くなると奴らの思うつぼだ。」

兵や官吏達に背を向け歩き出した閃王の背中を竜將軍、神樂は思う

この背中について行こう。そしてこの人を守り抜こう。この命尽きるまでお側にいよう。

決して隣にたてる器ではなくても・・・

？国は1年ほど前に十年続いた戦争をやっと終演させた

その代償はとても大きかった

国のほとんどが戦火にのまれ、国の復旧作業は一刻も早く行わなければならなかった

？国国王である閃は手始めに、食糧の確保に尽力を尽くした

人は食べねば生きてはいけない

ならその食を守らなければいけない

まず、戦火から逃れることの出来た州からは米などの食料を後宮に回していた財務から絞り出し買い付け、戦火に見舞われた州に貸し出しという形で配布。

それに伴い、種や家畜なども買い付け、その国の物であるという

形にして貸し出し、貸出料を低料金にして、種が実を付ければそれを売ったお金で払う、もしくは種の状態で返す。家畜の場合は、数を増やして、子供または卵の状態で返すもしくは、家畜を売りさばいた金額で返す。

返済期間は3年という形で無理のない返済を目指した
そうすることで食は少しずつ安定していった。

次に閔王が手を付けたのが仕事斡旋場という名の診療所である。戦争により多くの者が怪我をして家に帰っている者がいる。

そういった者達は怪我によりなかなか働きに出ることが出来ない
それでは、お金を得ることが出来ない

ならば、どうするかとなると、無料病院を作った
だが、ただより高いものはない！

無料病院に來た者は、重度の怪我と診断されない者以外は仕事口の斡旋を行う

戦争などにより腕がない者、脚がない者など四肢を欠損している者達には仕事を必ず与える事を各州に厳命し、同じ賃金支払いも命じた

多くの者達がこの病院を訪れ、王からの推薦状を持って村のある州に帰り、仕事を与えられ、その推薦状を王宛に送り返さねばならなかった

不当なことがあれば、その推薦状に書き王に訴えた

そうなると州の官吏達は王に睨まれるのが怖くて、きちんと仕事を与える

だがこれでは各州にかなりの負担を与えることになるだろう

そこで閔王は、推薦状を送り返してきた者達の割合を考えて、州に

対する税負担を減らした

これは州の官吏達は喜んだ

賃金はある一定料金で決められているが、人口が減ったしまった州としては多くの人材を集め、各々の州を潤わせたい

それには、王家に納める税が大変重かった

その負担が減るとなると州の官吏達は仕事の斡旋に協力的になった

こうして、次々と改革を進める閃王に民衆は期待をかけるようになった

閃を賢王と褒め称え、英雄視するようになった

だがそれを面白く思わない者達がいた

それが今回の暗殺を計画してきた者達だ

過去何度となく閃は暗殺者に襲われた

絶体絶命の状態も一度や二度ではない

だがそれでも閃王が生きているのは竜將軍のおかげである

竜將軍はいついかなる状況でも沈着冷静に物事を判断し、どんな敵からも閃を守ってきた

その強さから王を守る竜の化身として竜將軍といわれている

またその強さが認められ、王から玉を賜った

玉は成人女性に握り拳ほどの大きさの無色透明な玉である

誰に染められることのない、常に清廉潔白であれという意味とこれを持つことでこの国の英雄と王自身が認めたことを意味していた

それを飾り紐で包み、帯剣している剣に結びつけている

これによりこの国の誰もが閃王と並んで竜將軍も英雄視していた

この二人ならば世の中を安定させてくれるという、思いを込めて・・

「陛下のお越しにございます」

前触れを伝える挨拶に朝議の間にいた官吏達は平伏した

玉座に続く赤い織物を境に左右に30人ほどの官吏達が分かれている

カツカツカツ

と二つの歩く音が後ろから聞こえ玉座の方へ向かう

閃王が玉座に座ると竜將軍がその少し後ろに並び立つ

「いやいや、みんな待たせてすまなかったね。ちょっとここに来る間に奇襲があつてね。」

開口一番に世間話をするかのように王の口から発せられる言葉に平伏したまま官吏達はうろたえる
その動きを竜將軍は見逃さない
王の後ろで仮面越しの瞳で見つめる

「陛下、ご無事なのですか？」

三老の一人である60後半の髭が特徴的な凱がい 璋廉しょうれんの言葉に王は二
コリと笑みを浮かべる

「ああ、もちろん。竜將軍がいてくれたからね。にしても、まだ諦めきれない奴がいたとはねえ。」

王の声のトーンが変わった

ピーンと張り詰めた空気に官吏一人一人が凍り付く

「確かに私はまだ若輩者だ。侮られることが多いだろう。だがな、ただ手をこまねいていることはしない。そう思うだろう・・・琳官吏」

三老の後ろという最前列に近い所にいた琳官吏は大きな巨体をビクンと震わせる

額からは滝のように油汗を掻き顔を上げることが出来ない

「・・・な、な、何の事やら。私には全く身に覚えが・・・ガッシン！！

琳官吏の言葉を遮ったのは竜將軍の剣だ
いつの間に目の前にきたのは分からない

足音もなく近づいた竜將軍は

平伏している官吏の顔の真横に剣を抜き身の状態で床に刺した

「ひええええ！！」

飛び上がった官吏は後ろに後ずさり、顔面を真っ青にさせる

「琳官吏、あなたが未だ過去の栄光に縋り付いているのは知っている。そして私腹を肥やしていることも、証拠がそろっている。これは反逆の証ではないか？」

玉座に座り両膝に肘をつき両手を組む

上体を倒しその手の上に顎を乗せ、閃はニコリと笑みを浮かべる

「反逆は許されざる行為だ。不穏分子は即刻排除すべきである。そう思うであろう、琳官吏。」

まさに死刑宣告であつた
琳官吏は急いで平伏した

「ど、どうかお慈悲を．．．私はこの国を思つて．．．今まで陛下に、
この国に忠誠を．．．」

「見苦しい。兵よ。この者を牢に。罪状はおつて連絡する」
竜將軍の声と共に琳官吏の横には兵が立ち、引き連られるように扉
から去つていった

「さあ、一つの問題は終わった。さあ、朝議を始めよう」
王の一言に朝の朝議は始まつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1993r/>

外伝 王の竜玉

2011年9月29日13時54分発行